生きて行く私（上）

宇野千代

毎日新聞社

生きて行く私（上）

千代

新聞社

生きて行く私　上

定価　九八〇円

一九八三年八月五日　第一刷
一九八三年一二月二〇日　第三〇刷

著者　宇野千代
編集人　川合多喜夫
発行人　関根望
発行所　毎日新聞社
〒一〇〇　東京都千代田区一ッ橋
〒五三〇　大阪市北区堂島
〒八〇二　北九州市小倉北区紺屋町
〒四五〇　名古屋市中村区名駅

印刷　中央精版
製本　大口製本

© CHIYO UNO　Printed in Japan 1983

目

次

よくぞ生んでくれた　7
私はぎょっとした　14
月夜の花嫁　20
雪とは不思議なもの　26
友だちは男装の麗人　33
六十年前の昔を偲び　39
家賃も五十銭に負ける　45
敢然と立っている勇気　52
男を解放するために　58
私も罰をうけたのです　64
もう一度雨戸を　70
銭は一緒に払うけえ　77
人目につかないから　83

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

流人の島まで看病に　89
十三年も穿いた足袋　95
走って行く馬橇の音　102
町廻りの芝居の役者か　108
一言半句も難詰せず　114
髪を銀杏返しに結い　120
一瞬の間のラブシーン　127
真の気持ちはその逆　133
僕が死ぬときには　139
色男の額にたんこぶ　146
鶴が突然舞い上がった　152
泥棒と人殺しのほかは　158
その変わり身の素早さ　164

人の思いは蹴散らし　170
わたし、あなたが好きよ　177
億劫がりの北原にも　183
私たちの恋の出発点　189
決定的な齟齬が起こる　195
長寿国のフンザとは　201
私は一跨ぎに忘れた　208
これはアランの絶筆　214
文子の顔に死に化粧　220
厖大な数字の脱税が　226
平林たい子は観音か　233
谷崎の揺るぎなき自信　239
ぴゅうと風に靡いて　245

生きて行く私　上

カバー　宇野千代小紋
挿画　三井　永一
装幀　長峰　八州男

よくぞ生んでくれた

いまから八十四年前に、私は周防ノ国岩国大字川西の八百七十七番地の家に生まれた。山口県岩国と言わず、周防ノ国岩国と言う方が、私の昔風の感覚に似合っているからである。父は宇野俊次、母は土井トモ、父母の姓は違っているが、私は彼等の私生児ではない。私が早く生まれたので、入籍の手続きを怠っただけのことである。

土井トモは私を生んで、一年半しか生きてはいなかった。病気はその頃で言う肺病で、肺病やみのいる家の前を通るときに人々は、「肺病はうつるぞう。早う、馳けって行かにゃあ」と言って馳け抜けたものだと言う。それほどに恐れられた病気であった。まだ、やっと歩けるか歩けないかの私は、トモの寝ている寝床のぐるりを、赤い提灯を持って、よちよちと歩いていた。「この児のことが気にかかってのう、死んでも死に切れんでよ」と言って、トモは泣いたと言う。

この話は少女小説か、いまのテレビドラマの中のことであるように聞こえる。しかし、私

は、その稚(おさな)かった頃の自分の話を人から聞いても、悲しくはならなかった。トモの言ったと言う話をそのまま信じても、悲しくはならなかった。母と言うものの姿は一度も見たことがなかったので、恋しいとか懐かしいとか言う生(なま)の感情が、私の中には少しもなかったからである。

しかし、つい、この間、私が八十を越したのちのことである。或るとき、ものを考えていて、私と言うこの生身(なまみ)の体が、この世に生まれ出て来た不思議さに考えついたとき、ふいに、あの、姿もどんなであったか思い浮かばない、あの若かった母に感謝したいような気になった。よくこの私を生んでくれた、とでも言うような、何か、湯のように温(あたた)かいものが、胸の中を流れるのを感じたものである。

母が死んでからしばらくの間、私は高森と言うところにあった父の生家へ預けられたと言う。父の生家は私の家のある川西から、四里（約十六キロメートル）ほど奥にあった。奥と言うのは町中ではない、山の方に向かって行く方向を言うのであった。もの心ついてからも、私はたびたび、この高森の家へ行ったが、四里の山道を人力車に乗って行ったこともあり、馬の背に乗って行ったこともあり、歩いて行ったこともある。山道と言っても、山陽道の本道であるから、それほど険しい道ではない。峠の茶屋で休んで、外郎(ういろう)と言う、白い羊羹(ようかん)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

のような菓子を食べるのが愉しみであった。

峠を下りてからだんだんと山深く登って行き、高森まで出ると、俄かに広い往還になる。その広い往還の中に一筋、小さな流れがあって、両岸は柳の並木で、その並木の外側で道は二つに別れていて、ちょっとした見栄の好い町の家が列んでいる。父の生家はその町並の中ほどにあった。

私はいまでも、高森のこの広い往還を思い出すたびに、なぜ、あの山奥に、ふいにあんなに美しい町並があったのか、不思議に思う。父の生家があったために、そこのほんの一町（約百十メートル）ほどの町並が、あんなに美しい町並になっていた訳でもないのに、ひょっとしたら、そう言う理由ではなかったかと、私は錯覚する。父の生家は父祖代々の造り酒屋で、近在に聞こえた分限者であった。

その家の往還沿いには、太い格子の入った白壁がどこまでも続いていた。軒には「宇野酒蔵」と太い字を彫った部厚い看板がかけてあって、その下に、大きな、提灯のような形をした蜂の巣があった。

店さきには夥しい数の酒樽が積んであった。その前に檜の厚い板があり、大小の桝がかけてある。酒を買いに来る人たちの、小腰を屈めて這入って来るのに対して、「売ってやるぞ

よ」とでも言うような、一種横柄な態度で、番頭が酒を計ってやる。その主客転倒の有り様も異様とは思われていないのであった。店の奥の、一段と高くなった畳の上に、父の兄で、私にとっては伯父に当たる人が坐っていた。伯父は生まれながらの足なえであった。夏も冬も、炬燵をおいて坐っていたが、叱咤するのではない、一種、張りのある声で、店の采配を振っていた。

高森にいた間のことで、忘れられないことがあった。私は肺病やみのトモの子供で、体がとても弱かった。便が何日も出なかった。「いつでも、楊子のさきでせせって出したんですよ」と伯母はその話をしては笑った。せせって、と言うのは、楊子のさきでいじくって、と言うことなのであった。この伯母は噂に高い美しい人であったが、この美しい人が、足なえの伯父の妻であるのを、誰も不思議に思ってはいない。この家が特別の家である、と思われていたからなのか。

あれはつい二三年前のことであったが、私は『残ってゐる話』と言う自分の作品を書くのに、私の生まれた家の歴史、と言うようなものを、どうしても知る必要があって、そうだ、あの稚い頃に、その家に預けられたり、少し大きくなってからもしばしば行ったことのある、あの父の生家は、いま、どうなっているだろうと思い、ほとんど六、七十年もの間、見

ることもなかったその家へ行って見たのであるが、ちょうどあの伯父伯母夫婦から三代目の孫に当たる登美子さんが来ていて、家の中を案内してくれた。

部屋の数が三十二あった。何千坪もある庭続きの地所の奥に、杜氏その他、酒を作る職人たちの住んでいた長屋が続いていて、その長屋を出たところに、見上げるような冠木門のあるのを見て、私はちょっと吃驚した。稚い子供ではなく、現在の私が、昔の父の生家を見て、これは特別の家だなと思ったのだから不思議である。

あれはいつのときのことであったか、或るとき、この高森の家から川西の家へ帰って見ると、家には新しい母が来ていた。「今日から、これがお前のお母じゃ」。父がそう言った。私はこの降って湧いたような母を、吃驚して眺めた。色の白い、それはきれいな人であった。私には自分を生んだ生母の記憶が全くなかったので、生母とこの新しい母とを比較して考えることが出来なかったのである。

あとで年齢を考えると、母は十七歳のときに父の後妻に来たのであったが、来るとすぐに、私の弟になる薫が生まれ、次の弟の鴻が生まれ、それから妹の勝子が生まれた。それからまた、弟の光雄が生まれ、最後に弟の文雄が生まれたのであるが、この五人の弟妹たちに対してとった母の態度と、ただ一人の継子である私に対してとった母の態度とを比較する

と、誰の眼にも明らかに見受けられる違いがあった。

たとえば、到来物のおはぎを見ると、弟妹たちは早く食べたいと言って、母にせがむ。このとき、私がその場に居合わせなかったときなど、「まアお待ちい。姉さまがお戻りてから分けて上げるけえ」と言って、弟妹たちを待たせる。あの、芝居などで見る継子いじめの反対なのであった。

この母の子供の育て方は、私たち兄妹に思わぬ影響を与えたものであった。私と私の五人の弟妹たちとは、世にも仲の好い兄妹になったからである。後年、私が大森の馬込村に住んでいたとき、つい近所に、広津和郎が住んでいた。「宇野さん、あなたは不思議な人ですね。あなたは兄妹たちの姉さんではなく、まるで男の、総領ででもあるように、よく兄妹たちの面倒を見ますね。そして、また、あなたの弟妹さんたちもあなたによく懐いていて、みんなで仲よくしているのを見ると、ほほえましい」

広津はあの母が私たちをこんな風に育てたのだと言うことを知らないのである。私はあの母が自分にとっては生母でないと知りながら、そのままの母を愛していたのであった。

私はぎょっとした

しかし、この母が父のところへ来たときには、ただの十七歳の娘であったのに反して、父はその半生を、家と言うものを持たず、諸々方々を放浪して、放蕩無頼な生活をして来た四十男であった。二人の間では、生活の感覚がことごとに食い違っていた。夜半、ひそかに泣いている母の声を、私はしばしば聞いた記憶がある。或る夜更け、台所の雨戸を開けて、母はその生家へ逃げ帰ったのであった。

母の生家は、川西の家からほんの一里（約四キロメートル）しか離れていない、川下と言う村にあった。そのほんの一里しか離れていないところにあったのに、母の家の人たちは、父がどんな男であったか、話にも聞かなかったのであろうか。話に聞いていたのは、父があの、高森の宇野と言う近在に聞こえた分限者の家の次男である、と言うことだけだったのであろうか。しかし、いまから七、八十年もの昔の田舎では、こんなことは珍しいことではなかった。「お母、お母」と言って私は、母を追うて泣いたと言う。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.